

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	山岳部報 : 部報
Author(s)	
Citation	龍南, 204 : 101 - 116
Issue date	1927-12-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8982">http://hdl.handle.net/2298/8982</a>
Right	

# 山岳部報

## 温泉岳登山

栗本 先生

理三甲一 松井 貢介

越智 恭二

五月九日

出發は熊本驛を夜は未だ明けやらぬ午前四時二七分だ。電車はなし兎に角栗本先生に頼んで起して頂くことにし三時に起されはしたものの、余りゆつくりした爲かやつと汽車に乗れた。五時半三角着、六時出港島原へ、七時十分やつと通れるやうな瀬戸を通つて船は島原港に入る。上陸後直ちに自動車でうれりくれつた道を温泉へ温泉へと向ふ。海は次第に眼下に下つて三角港がさすがに眼前に浮んでゐる。沿道の兩側は温泉ツ、サが今を盛りと咲き亂れ山の中腹を色どつてゐる。ゴルフリンクの側の道を下り温泉の街に着く時に九時。普賢岳への登り道を聞けば今丁度通つて來たゴルフリンクのところからだそうだ。仕方無く數町引

部  
報

き返してゴルフリンクの芝生の所まで來たがさて何處から登るのかしら、右の方、野岳の中腹に路らしいのが斜に走つてゐるのが見える。こゝからでも登るのだらうとてこの所に出る可く無理をして、やつと此の路でない、他の路に出はしたものの、いくら行つても、荊棘と戦はねばならぬ様な進退谷の場所に出てしまつた。或は胴切り或は唐竹割となぎ拂ひなぎ拂へども敵は無數遂に力盡きて弱音を吹く者も出來てきた。三人よれば文珠の智慧とか、思案投首。頂上まで行けば路のあること鏡に照らして見るが如し(定理三)に依つて一途に頂上めざして勇ふるひ十一時やうやく野岳の頂上を極む。手に傷を負ふこと無數。戦の後勝利の嬉しさ其の顔に浮ぶ。野岳の頂上から前面の或る山の西南斜面にかけては金山ツツザばかり、しかも其の一本一本の木は平地に天下の名匠が腕を振つても、これ程までに綺麗に且澤山の蕾をつけることは出來ないのであらう。ことほどさうように澤山の蕾をつけて待つてゐる。普賢への本當の登山道と野岳へと他の山への三つの登山道

の合着点、丁度馬の脊の様な所に茶店がある、未だ晝食には早いやうだが先程の奮闘の疲れと空腹を癒すべく卷壽司にげくつこの卷壽司は先生御夫婦の御手になつたもの、其味も格別なり。十一時五十分道を普賢にとる。今までは趣を異にし金山楓で包まれてゐる。秋の紅葉はさぞかし金山を其艶でやかな色で包むだらう。春のツツザ秋の紅葉は温泉を四季とりどりに色づけ目世界の公園として四圍に紹介するに足る。二大エレメントであるかも知れない。十二時半温泉の最高普賢の頂上に立つ。汗ばんだ顔も身体も四方から吹き寄せる風にひやひやとして心持よい。空が晴れてゐないので見晴らしがよくきかないのが残念だ。只三角だけをそれと知ることが出来るだけ。午後一時舊道を傳つて島原へ直行することにする。途中谷間に雪水の残つてゐるのなみて汗も一時に引込んだやうだ。鳩穴、鳳穴等雪水の累累たる穴もある。首を入れただけで入らず。余は左右に分れる道が多いので右往左往、本當らしい道をたよりに石ころの多い歩きにくい道を下る。三人程の

學生に出遇つたのみ。至つて心細い。二時半龍田山のやうな松林の中で休憩、腹にガソリン加えてピツチをあげる。島原の町はずれの競馬場に来て(三時半)船場道幾らかと聞けば約一里と。一里を三十分でか、急がう、よし、三人足をそろえて走る。島原町へ入つて聞けば、づうと／＼と向ふだとあと十分いよ／＼馳足、何所で聞いても未だづうと／＼と向ふだと言ふだけ。ラストヘビーをかけて死者狂ひクロスカンツリーの選手も弱つたやうだ、あと二分!!一分!!汽笛は鳴つた。あつと思つた時横から聲をかけた者がある。宿の主人、船に入るなら此所から乗りなさい、直ちに傳馬船を出してあげますから。船に乗る人とみて親切に引止めて呉れたのだ。陸からは直ちに船の出るのを少し待つやうに言つてやつたらしい。切符を買ふそ／＼に傳馬船に乗り相生丸目がけて漕ぎ付ける。乗ると同時にスクリユウは廻りだした。汽船は汽笛を一つ山にこだまして來た時と同じ路を辿つて三角さして行く(午後四時)。今朝からもつてゐた雨はぼつり／＼鏡の如き海面に渦紋

を畫いてゐる。温泉の諸岳は雲間に其姿をひそめて其裾をながびかせてゐるだけ。一日で温泉を往復するのはあまりに急がしい登山だ。正當の道の間違なし登つて下れば或は一日一日で樂々たる旅行が出来るかも知れぬが最後の汽船が四時の爲、どうしても往復とも自動車によるか、急ぐより外は仕方ないと思ふ。それより一晩位温泉の温泉にゆつくり温泉情緒にでも浸つた方が好いやうな氣がする。但し僕等のは時が許さなかつたから。(松井記)

## 阿蘇五岳登山

### 第一班

文三甲二 赤星

文三甲二 有働

文三甲三 原

文二甲二 佐方

理三甲一 黒川

理二甲三 三島

理三甲二 山崎

文三甲二 藤山

文二甲一 町並

柄原 蒲池

### 第二班

—(二三)—

第三班 理三乙 保野

外 六 名

人は自然を何といふか或は偉大と云ひ或は神秘といふ然しかゝる形容詞は往々にして我々が自然に對して抱く憧憬の念を表示するにふさはしくない自然は偉大であるとは言はう然し自然は神秘である不可思議であるとは言ひたくない此の如き隔靴搔痒的な言辭を弄するに余りに自然が我々にとつて親しみの對象であるからだ、個人／＼の友情の間には猶疑すべき殘映を有するが自然と純自我との交渉には純情以外の何等汚濁的俗世的分子の介在を見ない而も自然と我々との死其物の様な寂漠な交渉は山の物凄く沈靜の中に於てこそよりよく得られる時に山禽鳴けど時に谿流のせゝらぎを耳にしても誰か其の深奥に潜む靜寂境に身を置かないものがあらう山を戀ひ山を慕うものは此の寂漠あり此瞑想あるが爲である。山に寢れ山に伏す者は山靈に抱かれて寢れ山靈を抱いて寢れる。自然は常に彼と共に存し彼と共に眠る。夜半不圖目覺めて怪禽の鳴き過るを聞き身の山峽に眠るを知る時遠

く俗塵を脱したるを喜び瞑想更に深きを覺える。リユックを買つて山に行く若人よ諸君は只單なるブルジョアの誇示の爲にするのではあるまい或は身体の鍛練と山に對する經驗を豊富ならしめんが爲にのみ行くのでもないだらう彼等の山行こそ言ひしれぬ力が彼等を山に引寄せるからだ戀人に對する愛着と憧憬とを抱いて彼等は山に行くのだ。今や山は彼等の戀人である彼等は時あれば山に行き山と共に語る山は彼等の生活に必要な隨伴物となり偉大なるリフレッシュメントが山によつて彼等の心に注ぎ込まれる。此して彼等は言ふだらう山に行け山に行け何故御前は酒食に費す金を山行に費さないか山の安息所が御前を待っていると阿蘇五岳は嘗て一日にして團体的に之を踏破したるを聞かぬ我々は去る六月十二日總勢十八人完全に此の行を終え九州山岳史上に一光彩を添えた私は今其の跡を記しつゝる爲拙い筆を走らせよう。

六月十一日(土曜)は明日の踏破を控へての忙しい出發である時ならぬ喧騒と動搖とを乗せて汽車は三時すぎ宮地に着く強力杖

にリユック姿の甲斐／＼しい一團が初夏の日を背にうけながら猫岳に向て動いて行つた高岳が物をも云はず突つ立つて中岳はそれと知られる。青々とした松の樹立が連峰を背にして感じの好い對象を作つてゐるのや傳説の火の國の乙女が獨得の方言訛に一抹のローカルカラーを漂はせながら通り過ぎて行くのやらが云ひしれぬ又憧憬と思慕の念を彷彿させる。左方の外輪山の一角がぐつとその位置を變じてくる頃になると猫岳は既に眼前數歩の所に迫る此の山麓に今宵を明し翌早朝踏破に取掛る豫定である、水を求むる事暫時人里離れた此の山峽に屯する若人は急がはしく夕餉の支度に取掛つた日は已に没して四邊漸く冷氣を覺え山影視界より没せんとして我々の焚く煙が山峽の夕を紫の帳に閉じこめてある山の夜は足早にやつて来て又足早に走り過ぎる談笑と熟睡との一夜が明けて今日こそ愈々踏破の日である朝まだき起き出る洗顔もそこ／＼に昨夜焚いた飯をこつ／＼とかづきこむ空は美しく晴れて露ばい雰圍氣が我々を圍繞してゐる漸て太陽は高岳の山肌に滑り始め

た猫岳が大きな山影を我々の頭上に投げてゐる。七時過ぎ愈々猫岳に先鞭をつける。早朝の山行の氣持よさが草を分け露を分ける若人の身も心も輕やかにして呉れる猫岳は阿蘇五岳中唯一の岩山其の特色ある山容は周知の事實である道は急峻な山峽を縫うて行く峽一杯を埋めた石が時折ざら／＼と崩れをちる山の冷氣が冷々と我等の肩に迫つて太陽は猶峽間を照すに到らぬ。漸て石が盡きる頃我等は灌木の中に道を轉ずる此の附近既に八合目である。行くこと數分視界漸く開けて早や山頂である快哉を叫ぶ若人が山頂の孤岩に群れた空は晴れ氣は清んで絶好の山日和外輪山が腰板の様に廻つて南郷宮地は足下である。遠く温泉近く祖母九重が其の秀麗な山容の間に一脈の親しみを漂はせる。深山つづじが南側の山腹一杯に眞赤な錦を綴つてゐて前方高岳のそれと相呼應じてゐる猫岳既に終り高岳が我等の來るを待つかの様今や我等は龍を得て蜀を望むの勢ひ一氣に猫岳を馳せ下つた。

高岳は五岳中の最難個所である其のつべらぼうの山肌と遠く遙に續く尾根とが我等

を脅威する我等は此の尾根をひた押しにせり上るのだ。先づ全員を三班に分けて行動の便を計る各班はリーダーを先頭にして愈々高岳登攀にかゝる。午前の太陽が高岳山腹にギラ／＼と照り映えて夏の日の脅威は既に始められてゐる今やリュックを負つた若人の群れが高岳の尾根に点在し始めた道なき尾根は急傾斜をなして高く遠く連つてゐる。ともすればすれ落ちる足に力を入れて喘ぎ上る我等の前進は途切れ勝ちだ二十間行きては休み三十間進んでは止る。夏の日が漸く其の酷威を増して汗ばむ肌に渴と疲労とが昂じ始める。遙に振り返り眺むる我等の眼に今朝のキャンパ地がそれと指される脚下既に遠くを隔て、脚上更に遙かなるの感である。水筒の水が堪らなく我等を誘惑する。呑みほしたい様な渴望を抑へつながら一口の水に一時の渴を凌ぐのは恰も水を食ひ水を噛みしめるの境地である。一休毎にごぼりと一口水を口にして疲れた足に力をつける。既に山頂の近きを知らせる一帯のつゞの群落が岩にこびりつき土にむしやぶりついて眞赤な花を咲かせてゐる

此の附近傾斜は益々甚だしく腹這はんばかりに攀ち上る。山頂の突角が眼前に現れると我等は先に走り上つた。嗚呼我等は今漸く高岳の頂上に立ち得たのだ三時間の苦闘の跡が我等の足下から涼風を絶間なく吹き上る。中岳の噴煙が着い空をくつきりと隈取つてすく／＼と立ち上つてゐる。杵島鳥帽子が錦繪にでもある様な滑かな山肌に一脈の女性美を漂はす其の山容の優美さよ我等は完全に五岳踏破を豫感した此處から中岳杵島へは一路平坦な山道である。我等は輕かな心と輕かな足とを踊らせながら再び高岳を離れた。言はば大自然が穿つた穴の中にうごめく虫である。我等が今や思うがまゝに大自然の頭の上を踏みつけてゐるのだ。我等は一種の自負と優越との感情にひたりながらなだらかな句配を下りて行つた。中岳の三角點は噴火口の突端に接してゐる。我等は此處に我等の足跡を印しながら思ひなしか一様に武夫原頭の歌を高唱し續けた。此の附近は眺望よく阿蘇火口を見るに適してゐる特に中岳三角點よりすれば火口は一望にして俯瞰せられる。我等が阿

蘇を見その偉大さを感ずるのは我等が外輪山の巔々たるを遠望する時と此の地點に立つて阿蘇の諸岳を見更に火口を俯瞰する時とである。褶鉢の底に穴を空けた様な噴火口そして其の周圍を取巻く美しい巖狀の裾火口に群れる人が全く小さな點としての存在だ。杵島鳥帽子の青々としたそれと中岳のどす赤いそれと如何に南國的情趣に富める色調を漂はせてゐることが。

我等は中岳を経て御松茶屋に憩う時漸く午後の日射が強くなる頃である。三岳既に終へて残るは杵島鳥帽子のみ鳥帽子は千里濱に流るゝ尾根を防火線傳ひに上る。

此の山は登攀の容易なる五岳中隨一である遠く中岳の噴煙を望みその山頂の眺望又賞すべきものがある。千里濱が夢の様に擴つていて放牧の馬が草食む様はまるで空想のパラダイスだ。原を吹渡る風がその肌色を二色に吹分ける。我等は此の恍惚に酔つた後で一射千里に鳥帽子を馳せ下る鳥帽子已に終へて元氣満々余威を驅つて杵島を征服する。杵島は高岳のそれを彷彿せしめる尾根を持っている。我等は道を右方の尾根に

無事に本日の行を終つた。(有働手記)

## 夏季登山第八班

文三 甲二 赤星 平馬  
文三 甲三 李 寅 基

盧 永 誠

理二甲一 永里 義治

此の班は祖母山に登つて久住に行くことになつて居たが僕が第一班にも行かなければならないので祖母の方を中止して直接久住に向ふこととした。

七月十日

熊本を早朝出發するのは眠いのと少々時間が無理なので前日から出發して宮地に泊ることゝし午後四時の汽車で宮地に行き驛前の宿に泊る。この宿は高いばかりで余りうまいものを食はせない。

七月十一日

朝六時半頃出發。天氣は余り善くなく併し日が照らないので樂に例の通り瀬本まで氣持のよい高原を歩くる。十一時半頃瀬本に着。午飯をたべて十二時半出發。少し行くと草が身の丈程にのびて居て少々面喰つた

がどうかこうか尾根に出た。氣壓が低いらしく蒸されて妙に暑い。肩に出て右にからんで行く頃からボツリ／＼降り初めたが氣持がよいなどと負け惜しみで歩くる。霧もまいてきて雷など聞えて來たがしばらくして又小止みになつた。併し何となく天氣が怪しい。

三時半頂上。余り見通しがきかない。立膝をしてその上に頰杖をついて考へ込んでふと眼をあけると手の下を盛に霧か飛んで居る。高い所に來た様な氣がしてちよつと氣持がよかつた。これが今夏の最初の登山でありこれからまだ澤山の山の頂に友を導いて行かなければならないと思ふと何となく緊張してくる。龍南生活の最後の夏にして有益に終はらしめよと自然に祈りたくなる。天氣がどうも怪しくまだ／＼先刻の雷雨だけでは不満足の様なので早々下る。

案の定、三又山の裾を通る時分からボツ／＼やつて來たなと思ふ間もなく猛烈な雷雨が襲つて來た。アルリと摺鉢の様に圖まれた山の中なので雷聲の反響のひどいつたお話にならない。友達に云ふ話も通じな

選び大きなズイックを描いて上つてゆく夕暮近い山氣が我等の汗ばむ肌に纏はりついて只徒に我等の意氣を鼓舞するのみだ。既に山頂に到り我等は此處に完全に五岳を征服した然も一人の落伍者なく我等は眞に完全なる五岳踏破を遂行し得たのである。此の日我等は午前八時既に猫岳に向ひ午後四時漸く杵島に達した此の間約八時間我等は豫定に先立つ約一時間にして好くこの結果を得た而も終始暑熱と渴とに戦ひながら緊張し努力し協同し愉悅しながら遂に最後の目的を達した我等は完全に一の事業を果すことを得た。我等は今や最後の足跡を杵島山頂に残しつゝ夕暮近い山氣に一抹の疲勞を感じながら遠く坊中を望んで下山し始めた、阿蘇山容既にその位置を變へて猫、烏帽子は見えるべくして見えぬ中岳獨り其の主位を擁して薄暮迫る中に噴煙の白々と並び又一の莊嚴である我等は一樣に今日の東奔西走を想起しながら其の慌ただしい山行の間に如何に多くのものを獲得したかを考へ静かな瞑想の中に感激の念の湧くを感じざるを得なかつた此くて我等は坊中に達し

に程である。その上この山には水が殆ど無いので忽ち水が出て今僕等の下らんとする法華院への澤は忽ち泥水の瀑が出来た。路を澤の左側にとつて下つて行つたが早や豪雨のために路が崩れて進行が遅い。その間も絶えず電光と豪雨と雷聲の總攻撃であるもう何もかもぬれてしまつてかへつて覺悟がきまつてしまふ。併し時には余りひどい稲光りのために思はず立ちすくめられたこともあつた。三十分余りこれらの洗禮を受けてやつとのことで法華院に飛込むことが出来た。早速を關で素裸になつて湯におどろこんだ。外ではなほ雷雨がその豪威を振ひつゝ居た。家に入ればもうしめたもので湯の中から首だけ出して「武夫原頭」なる。

七時頃小止みになつたが依然相當に降つて居る。明日の天氣が氣懸りだがこの位降つたから明日は大丈夫と思つて眠る。

七月十二日。

朝起きて見ると雨は依然として降つて居る。どうやら止みそうであるが止んでも河水が増して所々氾濫して居て未だとても駄

目とのことである。九時頃から小止みになり二時間もすると水も減るそうなので十一時十五分前宿を出た。小雨が降つたり止んだりする思はしくない天氣である。宿を流れる谷川は泥水で物凄いい音をたて、居る。

之に沿ふて下つて行くと思ふと少々前途が心配になつてくる。雨でぬれた草原を雲につまれた大船平治その他の山々をうらめしげに見ながら無言で進む。十五六分も歩くと河が澤山合して二間半程の河幅のある所に出る。泥水が蕩々と流れて居る。

之を渡らなければならぬと思ふと少々不安だが何となく山に入つた様な氣分が出る平常だと石の上を跳んで行けるのであるが増水の爲に見當がつかない。余りに深くは無いらしい。杖を作つて腰迄入る覺悟で洋服のまゝ水につかる。思つたよりも容易で深さも膝の上邊迄であつた。水の力も弱く別に押流されることもなく何なく渡れた。

こんなことを四五回くり返して時には腰位まで入つて一時に千町無田に着いた。今は無いが古い地圖に學校のしるしのある邊りで晝食につく。どうやら天氣も定つたらし

い。ぬれて氣持の悪いのを我慢して飯を食ひ一時半出發。それより少々坂道となつて峠を越すと飯田高原。明日登らんとする由布嶽が氣持ちよく眼前に現れた。此よりひたすら下り四時十分前湯平着。都合よく自動車の便を得て四時三十五分の汽車で北由布驛着。十町足らず歩いて湯平温泉に行く宿は廣告の一番多かつた日の春旅館に入つた。玄關には奥野多見男の書いた看板がかけてあつた。この宿はこの邊で一番よいらしく少々後悔する。併し乗り出した船なので氣持よくおさまる。今日の奮闘を思ふとこれ位の價値がある様な氣がした。九大の教授で五高の先輩と云ふ方に會ひ、晩飯を共にす。但しおこつて戴いたのではない。夜は散歩につれて行つて戴いた。皆疲れて居はしまいかと思つて心配したが案外元氣なので嬉しかつた。

七月十三日

七時頃發。露でぬれた雑木林の間を登るむしがへして苦しい。しばらくして草地に出た。立派な電光形の道を登つて十一時由布頂上。雲で殆ど眺望はきかなかつた。こ

の山は低いながら面白い變化のある山だ。

即ち初めが雜木森林帶次が草原帶で頂上の所が岩でゴツゴツして居る。僕等はこゝから鶴見嶽の方へ直接行けるつもりで荷物を持ちあげて來たがそんな路はなく又もときた路を下る。途中から左に折れて湯坪別府の街道に出て茶屋で休憩。少憩の後出發して鳥居(地圖がないのでよくわからないがそう記憶する)に二時半頃着いた。鶴見に登らばこゝかららしいが時間が遅れるので斷念して茶屋で一休みして居る所に自動車

がきて安くするから乗れとのことであるでまかせに一圓づゝなら乗つてやると上手に出ると運轉手なんなく承知した。地圖で見るとまだ三里近くあるのでこれは安いと早速乗る。余り安いので何だか氣持が悪いと思つたら途中から地獄廻はりをやれとか何々を見物しろお安くしておきますとやり出してきた。こうなるとこちらも負けな

い旅つれのした男なので樂にうけ流して旅館に直通する。湯坪温泉の主人からの紹介で安い宿に泊る。車代は一圓づゝきつちり渡したら妙な顔をして居た。僕等より一里

位後で乗つた女連れの客はたしか二圓位がナれて居た。何だかとても不愉快だつた。

七月十四日解散僕は瀬戸内海を船で神戸に向へ出帆した。他の人々は耶馬溪に向はれた。

別府の町は實に不愉快だつた。あらゆる人が旅人から金をしぼらうとして居るのが余りに露骨だ。湯も決してきれいではない勿論きれいなのがいゝわけではないが病人でない僕等には透明な方がどんなにいゝ氣持ちか知れない。これが日本八景で日本の温泉とは「大毎」も馬鹿にしたものだ。

(赤星記)

### 祖母久住由布耶馬溪方面

文三甲二 有働賢造

文二甲二 佐方快之

理三甲三 黒川宗雄

夏季登山プラン第八班祖母久住由布を経由別府解散の日定を延し耶馬溪英彦山方面へ向ふ積りであつたが途中雨に遇ひキャンブ不能の爲宿屋付となつたのと自動車賃に金を取られて止むなく英彦山を後日に譲り

別府へ出でず探耶馬を経て日田、久留米へ出る事にした。

七月十七日。(晴)(熊本―立野―津留―五ヶ所一の鳥居―風穴―一の鳥井)起きづら朝の五時五〇分の汽車で熊本驛を發つて阿蘇に向ふ。立野驛下車七時二十三分。

直ちに驛前の高森行の乗合自動車に乗る。途中鐵道建設中の白川第一及び第二鐵橋の雲の掛橋をチラと右に見た。月下、栃木両温泉地を後に南郷谷をグン／＼進んで行く今日の車はガタ／＼のフォードでなく氣持のよいシボレーだ。右方にガレに縁取られた可成年を取つた外輪山が長く續いて行手を鎖して居る。左方には鳥帽子、高、中岳

の若い山裾が若者のその様な豊かな丸味を帯びた肌を日に照して居る、白川水源を過ぎると高岳、根子岳が目近になつて來た山頂に霧をかけた中岳と思しき處からその霧の幕を突き破つて噴煙が中空にムク／＼と奔騰して居た。一方鋸齒の様な峯頭を空際に亂立させた根子の姿は何時見ても何處から見ても氣がすく様だ。高森八時三〇、自動車屋は割合に大きい。下車して前の店



でノミ取粉を買ふ。つんば婆さんが蠅取紙を持つて來て笑はした。再び自動車に乘る此處から道は急角度で登り始める。外輪山の急な内斜面否内壁を大きなジツグザツクを作つて登る道は全く之れ羊腸たるの形容詞を必要とする。坂を登りつめると南郷谷が一面に見渡されその廣さに驚く。之からダンダラ坂を下る一方である。左向ふに祖母の眞黒な姿がボカツと浮び出る。野生の花菖蒲、朝顔の群落の間をエンザンの音も輕やかに走つて行く。大分腹がへつて來た道裡で津留着十一時。自動車を捨て待合所で握り飯を食つた。此處は全くの山間の避村で宿屋らしいものも見えず家は只往還の兩側にボツリ／＼建つて居る位で話とは丸で反對だ。然しさすがに此處迄來ると涼しい風が頬をなでて吹く。丁度田植の眞最中だつた。津留村長・郵便局長等が眞の祖母を宣傳してくれると屈強な案内人をつけて下さつた。(祖母登山は此處から宮崎縣の五ヶ所へ出るのと豊後の神原へ出るのとの二路がある)津留を發して五ヶ所へ向ひ爪先上りの大きな道を行くと英字で示した祖

母山案内の追分が左側に立つて居た。之から道は山の左裾を廻つて次第に登つて行くあたりは雜木林が多く一の鳥井の人家に着いたのが二時。この間荷を持たない案内人の足が早く我々はリユツクが重いので可成苦しかつた。掛桶(カケ)を傳つて來る谷川の冷たい水をセ、ラギの音を聞きながら飲んだ氣持は何とも言へなかつた。荷物をおいて風穴を見に行く。一の鳥井を出るとすぐ谷川を渡る。橋から四本に分れた最右端の道を行く。この邊から先年の焼け跡がしばらく續きそれを過ぎると深い／＼谷を右にして製材所へ着く。あたりは見上げる様な楓の大木、ブナ、松の原始林で全くの深山となつて來る。道は此の製材所で行詰つて吾々はあたりの静けさを破る鋸の音を聞きながら左手前の坂をはひ上つて林道へ出た。昔この原始林を養つた水が今や鋸を動かして次第に大木を切採つて行くのはどうした事が十五分にして炭焼小屋に出る。右端の道に登ると古い追分に出る、之から道を右に取り其後は左へ左へと道を取れば谷川を二つ越えて風穴へ出られる。

最初の溪谷の幽麗さには全く驚かされた冷たく澄通つた水が天然の儘の苔の大岩の間をサラ／＼と流れる。登山者は此處で去り難い執着を感じる。我々の渴をいし目を心を慰める清水こそ神水でなくて何であらう。

少し手前から繁つて居た熊笹は此處等から益々深く、獅子でも出さうな暗い僅かに一尺幅の道は身の丈以上もある熊笹のトンネルを貫いて行く。風穴迄一の鳥井から二時間を費した。風穴は巨岩に圍まれた口を横に向けて開いて居る。早速案内人を先頭にランターンを手にして暗い穴の中へ下つて行つたが靴が水にツル／＼すべつて危険此上も無い。危いから下へ降りるのを止めて上の穴へ通ずる丸木橋を登る。落ちたら生死は疑問だ。試みに暗い下の穴へ小石を投込むとサラ／＼と水面をすべる音は果しなく下へ消える。微かなランターンの光を頼りに三間程奥へ入ると岩間には厚い天然氷が張りつめて居る。手がしびれて來たと思ふ中に汗にぬれたシャツが馬鹿に冷くなつて身体がブル／＼震へ出した。用意の小

ハンマーで氷を打かいで手拭に包んで引返した。口から出る息が白く見ゆる。全くの寒中だ。穴の外は氣持の悪い程暑い。何しろ零下何度の處から急に八十度の炎熱へ出たのだから。一の鳥井へ引き返し此處で案内人を歸して飯を焚く。夜は道の下の人家に泊めてもらつた。夜中高森で求めたのみ取粉が早速役に立つた。

十八日。(曇後晴夜雨)(一の鳥井―祖母絶頂―神原―竹田町―久住町)六時起床。

直ちに朝飯と共に晝の分迄焚く。谷川の清い水で顔を洗ふのは好い氣持だ。出發八時十分。春季登山班が道に迷つたので今度はいく道を知りて登つた。昨日の橋を渡り左から二番目の小道を高く延びたカヤの露をかき分ける様にして登つて行く。始め一寸急だつたが雜木の繁つた尾根へ出ると樂なもので宮崎熊本大分三縣の境界線をたどるとオチャバの開潤地へ出る。此處から道が左へ一本降りて居る。オチャバのこの鞍部を縦に突切るとツナの密林に入る。少し暗い林を出ると右曲して次がヤケヤマハラの開潤地だ。先程から木々と戯れて居た霧は

急に立ち込めて我等の眼界を二三町に制限してしまつた。霧の中を只登りに登つた。此の開潤地を横切ると左側に北方の神原へ下る道が別れて居る。その日も村の屈強の若者や美しい乙女が長い鎌で草を切開いて道作りに出て居た。追分の根元にリュックを置いて寫眞機一つを持つて頂上へ向ふ。之から道は少し急になつてアツシの中を進むと右にオテウツ水の清水がある。水筒に水を入れてしばらく亦アツシを縫つて頂上に着いたのが十一時半。頂上は十坪位の廣さで東側は削つた様な絶壁で勢込んで馳けて來た奔馬が底知れぬ深い谷に驚いて前足を突立てた様だ。先着の三人の村の人達に頼んで三人三角標と並んでカメラに入つた。この前後からちよい／＼切れて居た霧がバツと晴れると阿蘇連山と大分縣側の麓の山河が急に展開して痛快雄大の眺めは氣が大きくなるばかりだ。久住方面は残念にも全然見えなかつた。十五分位して下りリュックを背負ひ乙女等に會釋しながら神原へ降る。二人で抱く程の楓、ツナの密林内を縫つて下る急峻なこの道には少なからず弱ら

された。シンとして靜まり返つた中に只谷川の水が時々微かに聞えるのみで小鳥の聲も滅多に聞かれない。中腹で水際へ出た。木から木へとかゝつたカズラ。清流を渡る丸木橋相變らずの幽麗さだ。流れに沿つて下り麓で晝食を取つたのが二時半。直ちに出發。神原川の奇景を眺めつゝ、瀬川口との合流點へ來た時は三人共今降りて來た急坂と其後の一里半とにすっかり弱つてしまつた。此處で乗合自動車を持合せて途中魚住の瀑を左に見て竹田町驛前着六時。自動車を乗換へ久住町へ向ふ。車中にて大夕立にあひ幕營困難となつてしまつた。久住町着七時半。郵便局長の御紹介で小學校に泊めてもらふ。パンを夕食にして町へ湯に入りに出掛けた。十時頃就寢。

十九日。(曇後雨)(久住町―久住頂上―御池―砂千里―法華院温泉)朝から曇つて風が強い。出發八時。大分縣種畜所を訪れ事務所で道を聞いて今年新に東側の森林帯を縫ふ様に作られた新道を取る事にした。事務所を出ると所謂久住高原である。右より黒嶽・大船・久住の久住連峰を望み後方に

阿蘇祖母の連山とその高原が續きその起伏する山々は宛かも大洋の大波の連なつた様である。昔肥後守が參觀交代の途次通つたと言ふ久住宮原を連ぬる道路の一线には松並木が長く連つて大名行列が靜々とこの大自然の眺めを味ひつゝ、過ぎ行く有様も目に見える様だ。所々に放たれた牛馬の群岡と岡との間を長く見えかくれに流れる溪流この高原の朝は實に立派だ。僕の心は唯浮々とした氣持に浸つて足の運びも輕やかに斷崖の下へ着く事が出来た。之から頂上は見えないが山は急に立つて我等を見下して居る。吾々は左へ檜の植林の中へ割込んだ、之がそもゝゝ失敗の基で右の道を絶壁の直下へ下るべきだつたのだ。可成登つた處で道は消へてしまつた。引返しても新道と來て居るので自信がない。まゝよと思つて尾根傳ひにひた押に登つた。この頃から巖の水を豫期して水を飲みほして居た爲めそろゝゝ渴を覺へ始めた。膝を没するカヤを押し分けゝゝ大きなジツクザツクを作つて登つて行く。途中六合目で梅シヤムとパンで腹を作つたが不安と水の缺乏の爲め八合目

では全く疲れてしまつた。九合目のガレを或時は岩間の穴を逼り或時は岩をよじて登つた。時に三時半。先程小康を保つて居た天氣は急に暗くなつて霧が山頂をかこむよと見る間に頭上の黒雲からパラ／＼と大粒の雨が降り出しやがで耳をつんざく雷鳴が襲ひ來つた。風雨、雷の暴威も水に濡した僕等に取つては結局有難かつた。カツバを擴げて雨水を互ひに飲んだ時は生き返つた饒な氣がした。雨の稻星頂上に立つた我々は東千里を越えて空池を経て久住頂上へ登らねばならなかつた。雷鳴は止んだが霧の爲頂上の景は全然駄目だつた。時に四時半御池へ一寸出て砂千里へ降りた。雨の爲硫黄噴氣孔を斷念し法華院着六時、二時間登る筈だつた久住頂上へ道を迷つた爲六時間を費し豪雨の爲幕營困難となり其日は意外の番狂はせに終つた、かくして春も雨に見舞はれた僕は再度雨の久住の印象を深めたのみだつた。温泉に身体をのびして苦かつた今日の事を話し合ひ夕食後しばらくへが將棋をやつて寝たのが十時前だつた。

廿日(曇後晴) (法華院―千丁無田―雪深

峠―湯平―北由布―湯の坪―温泉と安眠とに充分元氣を恢復し一泊八十錢の素敵に易い宿泊料を残して僕の好きな法華院を後にしたのが八時半。霧の爲大船山を斷念し谷川に沿つて降つた。千丁無田を経て久住連峰に別れを告げ湯平へ急いだ。雪深峠を越えろと九水會社の植林地へ出る。左に小野田池と山下池が一寸見えたのは嬉しかつたやがて正面に當つて明日登る由布鶴見が巍然とその輪廓の美しい姿を現はした。今日は何だか遠足にでも來た様に輕やかな樂な行程である。湯平へ近付いて雨に一寸襲はれたが町の自動車屋に着いた時は晴れかつた雲間から日の光さへ覗いて居た。此處で會ふ人は皆手拭と小さな腰掛けとをさげた湯池客で皆屈たく無さそうである。驛迄自動車に乗り湯平發四時卅九分の大湯線で北由布下車。六町の道を歩いて湯の坪紫明館に泊つた。設備待遇は可成よい様だ。夜は町で盆踊りが賑つた。酒の空機をたゞく青年の節面白く歌に合せて目深かに姉さんかぶりの手拭に面を陸した乙女等が青年子供と手を取つて大きな輪を作り臂と足を奇

妙に動かしながら踊るのは山になれた僕等の目には面白く寫つた。夜は宿賃を心配してそれでもぐすり眠つた。

廿一日。(曇後晴)(湯の坪―北由布―野矢―森町―深耶馬溪)未だ少し暗い中に宿を出て荷物なしに由布山に登つた。登り口迄四五丁位だつた。初めの森林帯を抜ける程は可成急な道で其の上の鞍部の草原を越すと水が湧いて居た。登山小屋に着いた頃太陽は東、別府の海の彼方からその輝しい第一光を投げた。遙か下手に當つて小規模の雲海を見る事が出来たが頂上には霧がかけて居た。ジツガザツクに依らず眞一文字に登つたが急なので足を少し痛めた。頂上に霧の晴間を待つ事三十分。遂に霧の中で記念撮影をして残念にもその儘下山した。時に九時。此處は海に近いせいか植物に色々變つたものが多かつた。宿で十時半朝飯を食へ一圓五拾錢の宿代にやつと安心して北由布發○時七分。野矢に下車して此處から自動車で森町へ向ふ。途中菊池寛氏の『眞珠夫人』の汽車と自動車の衝突の場面に似た深い谷の線を廻る怖しい處を通り幾度

かヒヤリとした。森町迄可成長い道程だつた森町で下車し久方振りのバナ、の味を賞しつゝ、深耶馬へ向ふ。途中内帆足瀧(一名九十九瀧)を眺めて進む事一里餘このあたりから巨岩山容の美はやふやく凡ならず綠滴たる楓はその秋の美觀の如何に秀でたるかを思はしめた。一つ家、軍艦岩附近が最も岩、水、木の三拍子備はつた絶景であらう。只遺憾なのは深耶馬も最早深ならず自動車の馳驅によつてやふやく、俗耶馬化せんとして居る事である。若屋旅館の手前の草地でこの旅最初にして最後の幕營をした。夜は螢が一面に飛びかひとても綺麗だつた。温かなテント内にシヤツ一つで寝た。

廿二日(晴)(深耶馬―柿坂―守實―日田町―久留米―熊本)昨夜と同様若屋の台所を借つて飯を焚いた。出發八時。深耶馬の景も此處で終つた様なものでこの日の道程は平凡な二里半だつた。街道でカン／＼日に照されて大暑りした。柿坂發○時十二分の汽車で守實へ向ふ。守實に下車しすぐ驛前の自動車で日田に向ふ。水郷日田に一日送りたかつたが自動車にて久留米に急ぎ夜

九時八分熊本着解散した。

(佐方記)

## 燕岳鎗岳紀行

赤星、宮川、前田、鎌田、金瀧

七月拾八日(松本驛前飯田旅館泊)

木曾路を過ぎて汽車は午後十時松本に着いた。空には雲が低くたれて驛の電燈が朦朧とした光を砂利の上に投げて居る。夏服一枚の様に夜氣が追つて来る。信濃の國の夜は流石につめたいと思つた。

宿の蒲團の中にもぐり込むと誰も物言はない。驛前を歩く人々の足音がひどく郷愁を誘ふ。眼をつむつたが一寸寝つかれない。

拾九日(燕岳小屋泊)

五時に起きた。大急ぎで支度をして五時五十分松本驛發の電車に乗つたがまだ充分眼が醒めて居ない。六時半有明驛について皆人間らしくなつた様だ。有明驛から有明温泉まで自動車が通つて居るが其路を歩くことに決める。日が大方上つて頭の上からカンカン焼け付く様だ。一足毎に足もとからぼつぽと土煙が上る。

七時四十分有明温泉に到着。これからの道は中房川に沿つて上つて居る。兩岸の山々は濕りを帯びた綠色に輝いて、所々の繁みからおぼつかない鶯の鳴き聲が聞える。

其間をぬふて一團は黙々として歩いて行つた。しかく運命づけられた者の様に黙々と。此頃から空は曇つて居たが十一時中房温泉にたどり着くと空け雨になつて來た。茶をもらつて持參の晝食を取り、靴をつくるつて出發したが時正に正午。此から燕岳にかゝる。いよ／＼登りになると傾斜が急なので一寸苦しい。道には木の根や石ころが出しやばつて居るから歩きにくつて困る。途中雨がひどくなつて來た。緑の天蓋の様に頭の上で楯が組み合つて居て、つめたい霧がぼた／＼と落ちて來る。上服もズボンもしつぽりぬれてしまつた。止むを得ず各々蓆をかぶることにする。休むと寒いので夢中になつて歩いて居る。午後二時頃焚火をして居る大工を見つけて身体を温めさせてもらつた。此所で三十分程休んで出たが燕の小屋に着いたのは三時十五分だつた。小屋の中には色々な人間が不景氣面を並

べ立て、居る。仲間に入つてやつと落ち着いて見ると身体が次第に冷めて來た。セーターを着たがまだ寒い。下界の暑さが不思議だと思へる位だ。其の内つめたい霧に包まれたまゝ、此たよりない小さな小屋は夜に入つた。晩飯を食ひに食堂——十人も入れば一つばいになる様な部屋——へ行つたが食へさうにもない。生意氣にも小屋の人がライスカレーと名前をつけて居る代物は馬も食はない様なものだ。飯の一粒を取つて見ると七十パーセントは完全に生米だ。表面が一寸やはらかくなつて居るのにすぎぬ肉は何所を探しても出て來さうにない。此飯に對する悲憤を胸に抱いて石袋の様な、蒲團にくるまつたまゝ、山の第一夜は過ぎる二十日。(燕岳小屋泊)

と思ふ程有頂天になつて居る。よくしやべる會社員風の男。青白くふくれた山男、爺さんのはげた頭、朝鮮人の血色の悪い瘦せた面、等々すらりと體を取り圍んで居る、焚火を割る音や話し聲が遠くへ行つてしまつたと思つたら、眠かけて居た午後になると空に晴れ間が見えだして今まで霧にとちられて居た世界の所々に破れ目が出て來た。そして其が幕を開く様に大きくなつて行く。今迄小さな世界に苦しんで居た人達は皆表に飛び出した。見ゆる見ゆる。鎗が赤嶽、硫黄嶽、五郎嶽が、彼等は雪を抱いて黒々と天空を撫して居る。王者の様に嚴然とした姿だ。其青黒色のすそを純白の霧が切れ／＼に勢よく驅る。それが段々に此方に近づいてくる。急に眺望が閉られて身体がためたくなつたと思ふと又次第に明るくなる。霧は平原の方を指して飛び出して行く。信濃の平野は遠く長々と續いて大空は深々と青い。日光がたまらなくうれしい。午後四時頃燕岳頂上まで行く。小屋から三十分もあれば行け

る。夜になると中學生とか女學生の團體がおしかけて来て小さな小屋ははち切れさうになった。小屋の主人はそれを無理に押し込んでしまった。窮屈で眠れない。一寸動くと頭が衝突する。他人の腹を踏むと云ふ有様だ。

廿一日。(上高地温泉泊)

五時起床。戸外へ出て行くとはずばらしい景色だ。大海原の様に乳色の雲が眼下に遠く續いて横たはつて居る。其海の上に所々、山が黒々と頭をつき出して居て、雲と天との境にあたる所に富士山が小さく見える。大層小さく見えるものだから。一寸侮蔑して見なくなつた。昨日小屋の隅で島木赤彦氏自筆の歌を見たがそれに曰く。

雲の海の上に現はるゝ上つけの山、下つけの山

六時鎗岳に向つて一同出發。行く手には其山が頭を尖らして居る。一寸憤慨した様な格構だ、七時頃大天井岳にかゝる。一行はたい山を登り山を降り雪を踏み岩を踏み汗みどろになつてひた歩きに歩く。

九時西岳の小屋、十一時半殺生小屋に着

いた。此所まではすつと尾根づたいの道になつて居て大へん長い。天氣があまりよくなかつたので大分助かつたが、太陽がカン／＼照りつけたら此長い道はたまらなかつただらうと思ふ。食事を終つた我々は午後一時前、鎗岳の頂上に居た。涙ぐましい歡喜に満ち／＼て立つて居た。自分程幸福な人間が何所に居るか、と思つて立つて居つた、切々の霧が眼下を驅る。鎗を取り巻いたアルプスの連山が遠く近く聖人の様に坐つて居る。もの靜かな大きな自然である。

仕事は了つた。満足は得られた。此時は自分自身が満足以外の何物でもなかつた。鎗岳を降りて我々は雪溪にかゝつた。春の雪がまだ深く谷を埋めて居る、それが二十町程も續いて居たらう。やはらかな雪を踏んで、一氣に下り下りない様に注意しながら驅けて居ると頬が快くぽつぽとほてつて来る。破れた靴の中に雪が入つて指先がつかぬ。眼を放つと下から上つて来る人々が豆粒の様に小さく見える。此方は急速度で樂々と下り下りて居るが上つて来る人は氣毒だ。雪溪を這つてしまふと下には雪融の

水が蒼々と勢よく流れて居る。此が梓川の上流だ。此からの道は平坦で梓川に沿つて下つて居る。名も知らない木々の林をくゞり沼地を分け、岩を飛び、丸木橋を渡り恐ろしい速度で歩き出した。右側には穂高岳が威壓する様な様子で突き立つて居て、其下が美しい緑に兩岸を飾られた梓川だ。時間が経つに従つて其川幅は次第に大きくなつて行き道も次第によくなつて行つた。林の中には白樺の太木が立つたまゝ、所々に枯れて居る。牧草が道の両側に敷きつめた様に生えて居て木々の間から放牧の牛の群が見える。いよ／＼上高地に近づいた。もう四五時間ぶつ續きに歩いて居るので大分疲れて居る。日の暮れてしまつた林の中を痛む足を引きすつて温泉宿にたどり着いた時はものも云へない程疲れ切つて居た。

廿二日。

六時起床。一同元氣を回復して大正池を見に行く。宿から十三町位の所だ。立枯れの木々が何千本と知れず鋒の様に立ち並んで水面に影を落して居る。蒼々と雪融の水がたゞへられて小ゆるぎもしない。雲のかけ

が湖の面を走る。實にゆつたりした氣持である。白樺の林の向ふ側に燒岳が見ゆる、山側から五六ヶ所噴煙を上げて居るといふ面白い山だが、其煙迄ゆら／＼と暢氣さうに見ゆる。此所で二三日ごろ／＼して居たいと思つたが、ポケットの方が心細いので仕方なしに此温泉とお別れすることにした。九時宿を出て昨日の道の後返りすること約一時間、午前十時白澤渡の小屋まで來るこれから徳本峠になつて居る。十二時頂上で晝食をとる、もう此處まで來るとほつとなつてしまつた。此あたりまだ深山らしい氣持は残つて居るが次第に塵の世に近ずいて行くことは感ぜられる。墮落する様な氣持で山を降りて行つた。

四時半松本行島々發の電車に乗る。皆んなの顔に空虚な或る物が見ゆる。五時半松本驛に着いて此所で解散することにした。一行の者の分れ／＼になつて行く後姿を見て居ると頼りない氣がしてならなかつた。

(鎌田記)

## 大野ヶ原紀行

理二 宮川 本夫

理一 首藤 季一

第一日。宇和島―出目―土居―六町泊、

第二日。六町―竜王宮―大野ヶ原―羅漢

穴―小屋泊、

第三日。小屋―葦峠―分丸―土居―宇和

島解散。

參考地圖。宇和島。大野。檜原。(五萬

分ノ一)

本一冊讀むでなく、ぶら／＼暮した長い休暇の終を美しくせんものとS君と色々思案した結果思ひ付いたのがこの大野ヶ原紀行である。

一体、大野ヶ原は愛媛縣上浮穴郡と高知縣高岡郡との國境にある東西二里、南北一里大体長方形の臺地式の山で、山であると同時に高原である。其處には、なだらかな草原の起伏、清冽な水あり、夏のキャシビンガ、冬のスキー場としても好いスロープを持つてゐる。又石灰岩の山の常として其の麓には大きな鐘乳洞もある。頂上に至る通

(二四)

路の清新な原始林、美しい溪谷緑の草原、山麓の住民の質朴簡素な生活、これ等の織り込まれてゐる哀れな源氏ヶ駄場の物語や浪漫的な小松ヶ池の傳説は我々の紀行の興味を起すには充分であつた。

大野ヶ原に登る道は松山市を起點とするもの二つ、高知市を起點とするものが二つある。我々は郷里から出て高知からの登山道の一つ四萬川廻行の道に合する道程をとつた。

八月十九日。心配してゐた天候も薄曇ではあるが大した事もなさそうなので仕度もそこ／＼に午前五時未だ覺めきらぬ顔をして輕便のガタ汽車に乗る。爽快な朝風に氣分も晴々しく六時二十二分出目驛に降る。

七時半、自動車で出目を出發し四萬十川の上流廣見川に沿ふて進む。鍵山あたりから雨となつたので土居村の古市に(九時半)下車してS君の親族の家に寄つて雨の上るのを待つ。降つたり晴れたり又降つたりして、とう／＼午後になり二時半やうやく此家を辭して出發する。此家の中學生が共に行くことになり都合三人で出掛けることに

なる。

窪野を通り三瀧山の下を廻つて溪に沿つて登る。これからは路も細くなり其上雨上り後の夕陽の爲非常に蒸暑い。五時過ぎやうやく伊豫と土佐との境の峠に着く。途中馬子と商人風の旅人と一緒に峠から下りは皆で雑談に花を咲かせて夕闇のせまつた午後七時、六町の宿屋に着く、草深い田舎の宿のこと故不平も言へず、あやうげな五衛門風呂に汗を流して一同早く床につく。八月廿日。今日の行程は短いので、ゆつくり構へて午前八時前宿を出發する。六町から四萬川溪谷を溯ること、二十五町餘で龍王宮に達する。一寸道路から分れて參拜する。こゝで水筒に清水を満たして九時十分、又、谷川に沿つて道をとる。少し行くと路は細く坂にかゝるので流汗淋漓、少なからずあへぐ。清らかな谷の水でカルピスを飲む。當に有田屋以上の味である。山の中腹までくるとあたりは草原となり、撫子山百合、萩等が美しく咲いてゐる。同行の中學生は小々へばり氣味になつたので一同で元氣をつけて最後の急坂を攀ち午前十一

時、其肩に出る。眼前に擴げられた景色のなんと雄大なことだらう。先づ第一に目につくものは茫々たる偉大なる平原そのものである。春の大洋の如きならかな緑の起伏遠く右方の鬱蒼たる太古の林。かゝりみれば四萬川の谷川は白く光り點々と人家が數にられる。S君と二人で頂上(一四〇二米)を極めんとして暫らく進んだが人が通らぬ爲、熊笹が我々の肩までもあり道が抄らす其上南西の空に黒雲が湧いて來たので残念ながら引返し、草原を通つて十一時半、小松ヶ池に達す。

こゝの堂で晝食をとるべく先づ傍の池に鐘詰を冷す。丁度寫眞師と村の人が來てゐて附近の景色を撮影してゐる。大毎の日本新八景に刺激されて、この人々も我が大野ヶ原を世に紹介せんと案内記を發行する爲に視察に來てゐたのであつた。ゆく／＼はこゝら邊に旅館を建て遊覽の設備を具へ一大遊園地になると云ふ彼等の氣焰。この小松ヶ池から久萬を経て松山へ出る道を北に二十町許りゆくと舊廠舎の跡に出る。大野ヶ原は以前、陸軍の演習地であつて今尙廠

舎の跡には大きな木材が残つてゐる。大野ヶ原の諸所にある大きな凹所を砲彈の痕とも云ふがこれは嘘らしい。前に見ゆる源氏ヶ駄場のゆるやかな緑のスロープは誠に氣持が好い。昔此處が戰場としての物語も偲ばれる。晝食後の冷たい果物の鐘詰とカルピスに舌鼓を打ち、堂に記念の名刺を貼つて十二時半こゝを出發する。

源氏ヶ駄場の裾を西に進み午後一時半、大久保といふ部落に着く。此處で案内人を雇つて石灰洞である羅漢穴見物に出かける。案内人は早速竹の松明を用意して先に立つて行く。今下りて來た道を五六時後戻りしてから谷に沿つた道に折れ、暫らく進んで道を離れて谷に下る。洞は木立生茂つた中に、立ち重なつた大きな巖を入口として始まつてゐる。入口で案内人は松明に火をともし我々は懐中電燈、蠟燭を用意して洞に入る。

入口から約十間は僕して進まればならぬ暫らく進むと本窟と支窟との岐路に出る。本窟の長さは二町四十六間、支窟は四十三間。本窟の先端は傾斜零度となり水を湛ぶ



てゐる。此部は袋狀の大室となり、底は游土で埋もれてゐるが故に、崖下に小孔はあけるけれど先方を探ることは出来ない。

此の部の穴の方向は90°、180°で窟全体の方向は90°、180°である。(地學雜誌第三十六年第四百二十號による。)

我々は先づ本窟を左下に進む。俗に胎内くぐりと云つて下に水の溜つてゐる岩の下をやうやく匍匐してゆく。奥で風の吹くやうな音がするので案内人に尋ねると、それは澤山の蝙蝠が飛ぶ音であると。少し進むと、はたして無數の蝙蝠が我々の光に驚いて頭上をかすめて飛びかふ。

大きな石柱の門をくぐり游土に足を滑らせては、ひやりとし、鐘乳石、石筍に目を凝はせながら進むと又上からは岩が突出し下には水を湛めてゐる難所に來たがこれも無事通過する。所々の裂罅に沿うて生じた壁狀の鐘乳石が並列して、丁度腸の内壁を見るかのやうである。松明に照らされた薄黄色い壁面をみてゐると何だか氣味が悪くなり一入寒く感じる。洞に入つてから廿分、午後二時四十分其先端に達する。こ

ゝで水を湛めて上から迫つてゐる岩と水面とが僅かに隙間があるが、これ以上行つた人は無いようだ。噂ではこの先端が大野ヶ原の小松ヶ池に通じてゐるとのこと。松明も残り少なくなつたので直ちに引返す。諸所の難所に胸を轟しながら支那に入る。支那は本窟に比し鐘乳石、石筍等も少し平凡である。かくて三時十五分洞を出る。出ると同時にむつとした外氣に今更洞内の冷しさが羨しい。見れば一同の一張羅の夏服は膝から肩から脊にかけて土だらけである。案内人に禮をして小屋のある宿屋につく。時に三時四十分。宿屋の戸を開けて聲をかけたが誰も答へない。店に貓が留守役をしてゐるだけである。家の附近の山畑にも、それらしい人影が見ないので一同腰をかけた無斷で店先に列へてゐるサイダーをぬく小一時間として、やつと宿の夫婦が畑の仕事から歸つて来る。聞けば平地とても少い此の地方は一里も其上も遠方にある山岳へ仕事に出掛けるのだそう。此邊は未だ電燈がない。夕食後薄暗いランプの下に起きてゐても仕方がないので蚊帳の中に入つて

寮歌等怒鳴つてゐる中に何時の間にか眠つてしまふ。

八月廿一日。午前七時四十分小屋の宿を出發する。谷に沿つて非峠にかゝる。女郎花、撫子、萩等の秋草の間を通り八時五十分峠着、小憩の後出發する。高階野、坪野田を経往路に合して之を逆に西に進む途中同行の中學生が腹痛を起し休息した爲、正午やうやく分丸に着き此處の清流に纏詰を冷して晝食をとる。午後一時出發犬茅の峠を一時五十分冷風に汗を入れて通過する此頃から中學生だん／＼疲勞の色が見られたので歩度をゆるめて下る。然し麓の大道に出た頃極度に疲勞して呼吸苦しいと云ふので、彼をある茶店に憩はせて、S君と二人で土居村まで四十五町餘を四十分で頑張り、自動車を借つて連れ歸り無事古市の彼の家に送り、僕等二人は大元氣で午後四時自動車で土井村を出發し、車中サイダーの乾杯を舉げて此の紀行を祝し夕暗に電燈の輝く六時半宇和島に歸ることが出來た。